巌谷小波の「お伽噺」論にみる明治後期の家庭教育と〈お話〉

松山　鮎子

キーワード：明治後期、家庭教育、お話、お伽噺、巌谷小波、女子教育、国民教育、子ども像

【要　旨】本稿の課題は、児童文学作家である巌谷小波の「お伽噺」論を取り上げ、明治後期の家庭教育における〈お話〉のあり方の一端を明らかにすることである。具体的な流れとしては、第一に、巌谷小波とお伽噺の概要について説明した。次いで、第二に彼の「家庭」観をめぐる理論について、当時のその他の家庭教育や婦人教育の動向と比較しながら述べていった。最後に、巌谷のお伽噺に関する著作から、彼の「子ども」像と当時の家庭教育に期待された〈お話〉の意義について明らかにした。

明治後期から大正期にかけて、巌谷小波の一連の家庭教育論やお伽噺の創作の根本にあったのが、ヨーロッパやアメリカなどの列強国の中で日本が外交上対等な立場にたてる国力を身につけることであった。そのため、巌谷にとって家庭教育は国民教育であり、そこで子どもに話される「お伽噺」は国民童話であることが重要であった。また、こうした教育は学校と、それを補完する家庭という枠組みではなく、むしろ学校・家庭・社会という三者の関係性の中でそれぞれが独自の役割を果たすことで可能となるものであった。

さらに、家庭教育におけるお伽噺の意義として重要であるのが、それらは、家庭教育でこそ子どもに届けられるべきものであるという点だ。なぜなら、お伽噺は子どもにとって上質な娯楽であり「菓子」のようなもので、お伽噺の空想が、彼らに楽しみのうちに教育的な効果を与えるものだからである。

１．はじめに

(1) 問題背景と課題設定

本稿の課題は、児童文学作家である巌谷小波の「お伽噺」論を取り上げ、明治後期の家庭教育における〈お話〉のあり方の一端を明らかにすることである。

家庭における絵本の読み聞かせや語りが、近年、子どもの豊かな成長を促進するもの、あるいは親子関係をより深めるものとして重視されている。また、子どもの母親たちは子育て書を紐解きながら、ときには図書館等の絵本講座で学びながら、積極的にそれを実践する。このように、家庭で語り手の親が聞き手の子どもへ声によって物語を届ける行為は、〈お話〉として一人の読書と区別することができる。

ところで、我が国では伝統的な口承文芸の一つである昔話の「語り」が、古くから全国の農山漁村の家や地域で行われていた。こうした「語り」は、子どもだけを対象としたものではなく、共同体の維持存続のため労働の場や若者の集まりなど日常の様々な場面で語られていた。これに対して、明治期以降になると昔話を含めた〈お話〉に、学校や家庭における読書と同様の教育的意義が認められ始める。ここでは、前述の「語り」とは異なる、当時の時代的な文脈の中で生起した〈お話〉を、主に家庭教育との関係から考察していくこととする。

(2) 家庭教育をめぐる先行研究について

先に、これまでの家庭教育に関わる歴史研究を概観しながら、本稿で扱う課題分析のための視点を導き出していく。

先行研究によれば、「家庭」は1880年代の終わり頃から使用され始めた概念であり、1892（明治25）年に徳富蘇峰による『家庭雑誌』などが刊行された後に急速に広まった[真橋：2002]。この「家庭」という概念は、雑誌や新聞など当時新たに普及し始めていたジャーナリズムを通じ、それらの主な読者層であった、都市の中産階級の家族の理想像として形作られていく[山本：1991]。特に明治後期の1900年代前後は、祖先の共有を中核にした系譜関係に基づく伝統的家庭と、子どもの将来への意識を根本にした夫婦とその子どもの関係からなる新たな家庭とが混在した時代であった[小林：1982]。

一方で、同時期から学者や教師など教育関係者の間でも、学校教育と社会教育の基礎としての家庭の重要性が指摘されるようになり、家庭教育のあり方をめぐる議論が活発となった[真橋：2002]。これに関し、小山は当時の公教育と家庭との関係について、後者を「学校教育の補完物」として位置付けている[小山：1991]。また、中は、女子教育の重要な課題の一つが女性へ家庭教育の知識を教授することであったと述べている[中：1995]。このように、明治後半期の家庭教育は、主にメディアとの結びつきや学校教育・女子教育と関連して方向づけられてきた。

ではここで、家庭教育に期待された役割の詳細について三つの視点から述べていきたい。第一に、それは家庭を通じて人々へ国家意識を浸透させることである。具体的に、明治期以降、新たな家庭像がとりわけ女性に「国民」としての意識を醸成し、人々を国家社会に引き入れるための一翼を担った点が指摘されている[牟田：1996、小山：1999]。

次いで、第二が家庭における母性の役割の重要性である。家庭教育の先行研究の多くは、当時の種々の家庭教育論において愛情深い母子の繋がりが子どもの健全な成長にとって欠かせない要素と認められており、家庭の母役割が強調された点を指摘する。それと同時に、女子教育や婦人教育によって、女性が理想の母親像を体現すること、我が子の模範となる母親が「道徳的品性」を養うことの必要性も主張された[真橋：2002]。

さらに、第三として、同時期の学校教育と比較して家庭の「遅れている」状況を問題視し、それを「近代化」することで生活全体の質を改善しようとした点である[小山：1999]。これは、例えば、「科学的・専門的」知識に裏打ちされた家庭教育、家庭経営の「合理化」などといった論理により展開された。

次に、家庭教育と〈お話〉との関係性に関する先行研究を検討していく。これまでの研究では、当時の家庭像や母親像を分析したものは多くみられるのに対し、そこで利用される具体的な教育手段に焦点を当てたものはほとんど見られない。わずかに見出された論考には、例えば、明治期以降の絵本を含めた玩具観の変遷の研究がある。それによれば、同時期に欧米から移入された教育思想の影響で、玩具を用いた「遊び」が子どもの発達に不可欠なものであると認識され、良質な玩具の研究が盛んになり幼稚園や家庭の教育に利用されるようになった[永田：1987]。

また、本稿の課題に直接通ずるものとして、明治・大正期の幼稚園教育と家庭教育における〈お話〉の役割の研究がある[是澤：2002]。ここでは、明治20年代以降の家庭教育書の分析によっ

て〈お話〉観が考察されている。是澤は、それらの書物に紹介される〈お話〉の題材が昔話や偉人伝、外国童話などであり、それは当時の幼児教育で取り入れられた話材とほぼ重なっていた点を明らかにしている。また、母親を中心とした大人が「耳から知識を注入する」お話をすることが、優れた教育手段として認められていた。さらに、子どもに物事を説明する際は科学的視点に基づく必要があり、その意味で、古くからある昔話の「迷信・俗信」が排除されることが求められた。

これらの先行研究に対して、以下の分析ではここで挙げられたような〈お話〉観に対して批判的立場にあった巌谷の家庭教育観、女性観、子ども像などの理論を詳述しながら、明治期後半の家庭教育論の新たな側面を導き出していきたい。

本稿の具体的な流れは、以下の通りである。第一に、巌谷小波と「お伽噺」の概要について説明する。次いで、第二に彼の家庭観をめぐる理論について、当時のその他の家庭教育や婦人教育の動向と比較しながら述べていく。最後に、巌谷のお伽噺に関する著作から、彼の子ども像と当時の家庭教育に期待した〈お話〉の意義について明らかかする。

２．巌谷小波の「お伽噺」をめぐる活動

巌谷小波（1870－1933）は、滋賀県甲賀市の水口藩の藩医の家柄であり、貴族院議員で著名な書家でもあった巌谷修の三男として生まれた。幼少時からドイツ人のもとでドイツ語を学ぶなど、恵まれた環境で家業の医者になるための教育をうけて育った。しかし、成長してからは文学への志を貫き、1887（明治20）年、17歳で日本最初の文学結社である硯友社に参加した。ここで彼の特筆すべき業績として挙げられるのが、1895（明治28）年に国内で初めて児童のための創作文学『こがね丸』を執筆したことである。この作品が子どものみならず大人からも好評を博すと、彼は博文館発行の雑誌『少年世界』の主筆となった。同時に、子どものための読み物として『日本昔噺』、『日本お伽噺』、『世界お伽噺』といった書物を次々に刊行した。当時の誌面上では、巌谷を「少年小説會壇場のシェイクスピア」と評しており[1)]、子どもの読者層における彼の存在感の大きさがうかがい知れる。そして、今日の児童文学史では、こうした彼の一連の創作活動はそのまま近代児童文学の確立期として位置づけられる［河原：1998］。

また、児童文学の執筆活動と並行して彼が力を注いだのが、各地での大人向けの教育講演や子どものための「口演童話」であった。口演童話とは、お伽噺を中心とした物語を小学校の講堂や地域の劇場などで大勢の聴衆に向けて語る、独自のスタイルをもつ語りである。これは、主に学校以外の場で子どもに「良質な娯楽」を提供するために行われた活動で、巌谷小波を始めとする少数のプロの口演童話家達により、大正から昭和初期にかけて全国に行き渡った[2)]。

一方で、大人向けの講演の中心は、婦人向けの家庭教育についての講演であった。巌谷は後年の回顧録の中で、1896（明治29）年に、小学校で初の口演童話を行った後に「大日本婦人教育会」の嘱託を受け、初めて家庭講演とお伽噺講演を行ったことを記している［巌谷：1920］。この大日本婦人教育会とは、1887（明治20）年に東京都内で「小石川婦人談話会」として発足し翌年改称した、女子教育者の石井筆子らにより設立された婦人教育の啓蒙団体である。当会の活動は主に、会員向けの機関誌の発行や各種の講演会の開催などであった。雑誌の刊行趣旨には、男は外

で働き、女は内を守る「男女分業論」の立場と学芸知識と「貞操淑徳」の徳育とを平衡して教育すべきであることが主張されている［津曲：2005：27］。巌谷が「婦人教育会の方でも新しい方面に活動したい」という当会からの講演依頼を承諾したのは、本来は、「お伽話（ママ）の宣布」の機会を得たからであった［巌谷：1920：161］。しかし、その後明治末期から大正期にかけて、彼はお伽噺の著作だけでなく、家庭や婦人教育に関する講演記録集を多数刊行することとなる。この意味で、元々は文学作家であった巌谷は「お伽噺」の創作活動を契機として、家庭教育や女子教育へ関わりを深め自らの理論を形成していったものと考えられる。

他方で、彼は1901（明治34）年以降、自らの創作する児童文学で仮名を実際の発音に対応させて記す「発音式かなづかい」を用いた。そのため、当時の国語改良論者らによる文部省編集の国語読本の改修（発音式かなづかいの採用）事業にも参加した［管：1956：54］。ただし、後述するが、巌谷は大正期以降のいくつかの著作で「桃太郎主義の教育」を標榜し、当時の学校教育のあり方に批判的な主張を展開している。したがって、様々な講演活動や公教育政策への参画が彼の一連の思想を鍛えていったものと思われる。では次に、巌谷小波の家庭教育についての理論を具体的にみていきたい。

３．家庭教育論における家庭と母親像

(1) 家庭教育と女子教育を中心とする時代背景の概観

巌谷小波の家庭論・教育論に関連する内容で、お伽噺の口演記録中心の著作と、雑誌や新聞等に掲載した記事を除いた著述には以下のようなものがある[3)]。

①「家庭と児童」小波口述・1899（明治32）年
②『家と女』隆文社・1906（明治39）年
③『女子処世　ふところ鏡』大倉書店・1907（明治40）年
④『桃太郎主義の教育』東亜堂書房・1915（大正４）年
⑤『新家庭　女子供の巻』大倉書店・1916（大正５）年
⑥『新しい奥さま』博多成象堂・1921（大正10）年
⑦『桃太郎主義の教育新論』文林堂・1943（昭和18）年
※⑦のみ死後の刊行、また、「家庭」を冠した講演記録として他に、家庭で母親が子どもに聞かせるべきお話を語った講演の記録である『家庭口演十種』（木村小舟編）がある。

上記の著書は、いずれも初めての家庭教育の講演を依頼された1896（明治29）年以降から、大正初期に集中していることが分かる。また、この間、お伽噺の作品集などの創作文学の類は数え切れないほど刊行されており、それらは彼の死後、1950（昭和25）年発行の『さざなみどうわ』まで続いた。本稿では、明治後期から大正初期にかけて書かれた②～⑤の著作を中心に扱っていくこととする。

彼の家庭教育観について詳述していくに際し、まずは当時の家庭教育や女子教育の状況について触れておきたい。前述のように、明治期以来の日本の家族をめぐる情況は、祖先の共有を中核

にした系譜関係に基づく「家」と、子どもの将来への意識を根本にした夫婦とその子どもの関係からなる「家庭」とが混在するものだった。そのような中、社会的には自由民権運動の高まりとともに教育分野において男女平等の思想が徐々に育まれつつあった。また、「婦女改良」の理念の下、主に上流家庭の婦人が欧米の新しい知識を吸収し、新時代に相応しい家庭を建設するべく全国各地に婦人団体が創設された[4)]。これらは、会員同士が親睦を深めながら家政や衛生、料理、裁縫といった家庭生活の知識を身につけることに目的をおいた組織であり、欧米諸国に比べた日本女性の文明的遅れへの問題意識を根本にもっていた。こうした欧米の文化に対して日本を劣ったものとする考えは、大正前期に始められた政府主導による生活改善運動にもみてとることができる。同運動は、特に家庭での消費の抑制と生産力の向上によって、合理的かつ近代的な生活の実現を目指すものだった[小山：1999]。このように、当時にあっては国家の基礎として家庭を「文明化」することが、諸外国に勝るとも劣らない日本の立場を築くことになるという論理図式が成立していた。これに加えて、明治後半期からは女子の就学率の伸長が著しく、婦人の職業進出もみえ始め、女子教育の普及・拡充が国家の喫緊の課題ともなった。また他方では、大正期に入る頃に社会主義思想に根差した反体制的な婦人運動も急速に成長してくる。そのため、時の政府は従来の儒教的家族制度の存続に危機意識を高め、反体制的な流れへの対抗措置として保守的な女子教育や婦人教育の強化にいっそう力を入れることとなった[5)]。

こうした動きに加え、1890年代後半はジャーナリズムの家庭教育論の隆盛した時期でもあった[牟田：1996：158]。例えば、冒頭に挙げた『家庭雑誌』だけでなく、自由学園の創立者である羽仁吉一と羽仁もと子は『家庭之友』（明治36年創刊、41年に『婦人之友』と改題され現在に至る）を発刊した。また、新聞紙面でも1900（明31）年に『大阪毎日新聞』が他紙に先駆けて「家庭の栞」欄を創設した。さらに、翌年には読売新聞社が『家庭の教育』を出版し、著名人数十人に尋ねた家庭での教育方針を紹介した。他にも、児童研究会の発行した『児童研究』（明治32年創刊）や東京女子高等師範学校内のフレーベル会による『婦人と子ども』（明治34年創刊）等は、心理学的な観点から、より専門的な読み物を世に送り出した。これら日本人の手になる理論に加えて、同時期にはマレソンの『家庭教育原理』（明治24年）やルソーの『児童教育論』（明治30年）など海外の家庭教育論の翻訳、紹介も進み始めていた。このように、当時の家庭教育論は理論的に追求したものから著者の体験談を綴ったものまで、その内容は多岐にわたる。しかし、いずれにせよここでの家庭教育の論調には、旧来の家で行われてきた教育への批判が存在し、それに代わるべき新たな家庭のあり方を模索した点が共通していた[小山：1991：70]。別の側面から言えば、ジャーナリズムの家庭教育論は公教育制度の浸透に伴い、その効果的な運用の基礎ともなる家庭の教育を改善・発展させることに問題意識があった。そして、これら書物や雑誌上の「子ども」、「家庭」、「母親」といった言説をめぐる話題によって、大衆の読者層においても新時代の新たな家庭像が模索され、広まりつつあったと考えられる。

(2) 巌谷小波の「家庭」―国民教育としての立場から

では、まず巌谷の家庭教育論にみられる女性観をみていこう。上述のような時代状況の下、著書『家と女』（1906）の「家庭と社會」で、巌谷は女性が家庭と社会との双方を「楽しむ」こと

が重要だとした。具体的に、昨今は「家庭主義」が行われることで妻が家に籠りがちになり、外での社交を夫にのみまかせきりにしている。しかし、本来、家庭と社会の交際はともに両立させて楽しむべきもので、「妻たるものも、之を共にせねば成らぬ」[6)]。ここには、ただ家を守るだけの女性というより、進んで「社会」との交流を行う積極的な女性観が表れている。また、別の箇所では家庭で文学を読むことの意義を下記のように記す。「ごく廣い意味の文学と云ふものは、苟も文明國の人間として、皆之を解して貰ひたいと思ふのであります。それで一言に申しまするとと、家庭の中に文学を入れて、文学趣味を解する者の澤山出来て貰ひたいと云ふのが、私の希望なので御座います」[7)]。このように、巌谷は当時の潮流と重なる男女平等の思想に基づきながら、自身が文学者であったことから、文明国らしい文学の教養をつけた女性像を描いた。そして、そのような女性が家庭を守るだけでなく、男性同様に社会の場で交際を活発にすることを求めたのである。

ただし、『女子処世　ふところ鏡』（1907）では、「尊い寺は門より知れる、立派な家庭は兒で知れる。要するに兒は親の反射鏡である。取り分けその母親の」、「男女同権といふことは賛成であるけれども、男子のすべき事を女子がするといふのは決して宜しくない」[8)] とも述べており、彼の男女平等思想、女性の積極性は、あくまで家庭の母たる本分を務めるために必要な素養を身につけるためのものだった。

では次に、「家庭」についてはどうだろうか。『新家庭　女子供の巻』（1916）には、「大正の新家庭」と題する著述がある。これによれば、明治期までの子どもにとって父親は怖い存在であり、父子間には「鉄柵」のような距離があった。しかし、新しい時代の父子および夫婦関係は、「愛」によって成り、「平和親密」な家庭を保たねばならない。それと同時に、そこには明治天皇と国民の間にあった君臣関係のような信頼も必要である。言い換えれば、大正の新家庭はこれまで以上に「ハイカラ」なものになるだろうが、そこに信頼と愛情、すなわち「信と愛」のあることが平和の楔である。日本では、日清戦争前後にジャーナリズムを通じ、都市中産階級の家族間で「愛」や「親密さ」といった情緒的結合を重視する家庭像が理想とされるようになった[9)]。上記のような巌谷の家庭観は、そうした当時のメディアに表れてきた考え方とほぼ重なるものであろう。つまり、彼の考え方は「夫婦中心の調和を志向する家庭」、「伝統的な家制度からの脱皮」といった「当世風の家庭観」[10)] と矛盾しない、時代に即した新しい家庭のあり方を期待するものだったと考えられる。

そして、そのような彼の家庭観の背景にあり、教育の目的ともなっていたのが「国民教育」の思想であった。これに関して、巌谷は現在の世界の情勢と日本のおかれた立場を考慮することを必ず念頭におき、自身の教育論を展開してきた。その姿勢は例えば、以下のような一文に典型的に表れている。

「日本は今や世界的の舞臺に立つて、列強と競爭をしなければならぬと云ふ、大責任を持つて居る以上、夫等の競爭の對手と、矢張り同じ速力を以て進むと云ふ覺悟を持たないと云ふと、後に取り残されて仕舞ひはしないか、一歩出たかと思ふと、引き戻されると云ふやうな風な、手緩い進歩の仕方では、どうも前途が思ひ遣られるのである」[11)]

巌谷は、お伽噺の口演活動や文部省の教育政策事業に携わっていた関係で、ドイツやアメリカなど諸外国を訪問する機会が多かった。その折に、しばしば現地の子ども達や教育者らと接し、その地の学校や家庭の様子を知ることができた。そうした経験から、彼には外国人に比較した日本人は「意志の力」が最も欠けており、その鍛錬こそ将来の国民教育に喫緊の課題であると感じられた。ここで巌谷の言う「意思」には、二つの意味がある[12)]。第一は、従来の日本人が重んじてきた忍耐や堅忍などの「己に打ち克つ」意志である。しかし、これからの時代は、第二の「爲たいと思ふことを敢てする」という「他をも制する」意志が必要である。言い換えれば、巌谷は、欧米人のような「進取敢為」の積極的な意思を育むことが、これからの時代に日本が世界に台頭するために肝要であると主張したのである。彼は日本と欧米とのこのような意思のあり方の差が、特に諸外国との外交上の付き合いの際に不利な形で現れると述べた。それゆえ、将来的に日本を背負って立つことになる子どもの教育には、その鍛錬こそが重要なのであった。

さらに、こうした教育目的を掲げた上で、彼は通常の学校教育と家庭教育という二者の関係に加え、「社会教育」の必要性も説いている。ところで、この時代は「社会教育」と「通俗教育」の用語が混在したが、政府は「社会」が社会主義を連想させることを危惧し、後者の語を公式に採用していた。しかし、それが第一次世界大戦後には「社会教育」と改称され、国民の社会生活全般を向上させるため、政府による新たな教育政策の整備・拡充が進んでいった[小山：1999]。この点からも分かるように、日本の社会教育政策は、欧米の社会教育が成人教育の意で学校の拡張事業を主に展開したのに対し、「社会」が強く意識され、社会生活の向上や共同精神の涵養を目的とする「社会の教育化」を重視したものだった[上杉：1996：16-18]。巌谷は、この昨今の文部省による通俗（社会）教育事業への着手を、遅まきではあるが大変良いことと評価している。また、この頃は、政府の取り組みだけでなく教育家や仏教徒、キリスト教徒らによる子ども相手の教育的な催しが盛んになっていた。こうした情勢についても、彼は大人が「第二の國民たる少年の教育」を忽せにしないことの証拠であり慶すべき現象であるとした[13)]。

上記のように、巌谷は自らの時代分析によって何より国民教育という点に重きをおいた。そして、それに基づく家庭教育論は、教育が家庭と学校だけに留まるものでなく、学校と家庭、社会の三者がそれぞれに独自の機能を果たすことを前提に展開されたのであった。

では、そうした枠組みの中で家庭教育にはいかなる役割が求められたのか。次章ではそれについて、〈お話〉の観点から考察していくこととする。

４．「新時代」の子どもの教育と家庭での〈お話〉

(1)「国民童話」としてのお伽噺

ａ．文体の書き換え

では、次に家庭教育における「お伽噺」の役割についての巌谷の理論を述べていく。まず巌谷のお伽噺の特徴について説明すると、それは、彼が国内外の童話を当時の日本の児童向きに書き改めた点にある。彼は、豊かなドイツ語力を駆使して、西洋の昔話であるメルヘンを日本の子どもたちに紹介するという、当時には未開拓であった活動に精力を注いだ。そして、その際にはそれらを一字一句翻訳するのではなく、登場人物の名前や舞台を日本風にするなど、国内の子ども

に理解し易いよう配慮したのである。具体的に、例えばドイツ民話の翻案「鬼大名」を挙げてみよう。これは、一見すると本文に登場する人物、筋ともに武士の物語として読むことができるが、実際の原作は中世ドイツの勇士の話である。また、そのような形式面だけでなく、グリムのメルヘン「白雪姫」の翻案である「小雪姫」では残酷な描写を削除したり、継母の継子いじめを戒める言葉を加筆したりする内容面の改編も行っている[14)]。

さらに、日本の昔話でも、古くからある物語をそのまま掲載するのではなく、当世風の挿絵や唱歌を伴うような作品に仕立てたものが多かった。他方で、物語の本文には、それまでにはない日本の本来の昔話の語り口を活かした文体が採用されている。例として『日本昔噺』の「桃太郎」を挙げてみる。物語の冒頭から、お婆さんが川で洗濯中に桃を見つける場面までの本文を見ると、「むかしむかし在る処に、爺と婆がありましたとさ。或日のことで、爺は山へ芝刈りに、婆は川へ洗濯に別れわかれに出て行きました（中略－引用者）やがて川上の方から、大きな桃が、ドンブリコッコスッコッコドンブリコッコスッコッコと流れて来ました」（下線－引用者）[15)] と、語尾や擬音を工夫し、細かな情景描写を省いた文章で書かれていることが分かる。ここには、口伝えで伝えられた昔話の語りにある、「素朴、簡潔、光明的、軽快、可笑しみ」といった要素が生かされている［菅：1956］。題材の収集に際して、彼はお伽噺の創作では、桃太郎や猿蟹合戦など明治期以前の『お伽草子』の時代からの昔話を、主に江戸時代の安価な絵雑誌である赤本から新たな作品につくり直した。その他、各地から集めた伝説や人物伝についても、先ほどのような日本の昔話の語り口に近い文体に書き改めた。

では、なぜこのような手法を採用したのか。それは、彼がこれらの作品の全てを当世の日本の子どものための「国民童話」として新たに生み出すことを目的としていたからであった。巌谷は、従来の昔話について「昔のまゝのお伽話は殆ど駄目」と主張し、さらに、江戸時代からある仇討ち等の物語も「今日の世の中」には面白くないと批判した[16)]。なぜなら、彼に言わせれば、それらは「消極的」で「因循な」道徳律の下に作られているからである。例えば、現在でも有名な昔話「舌切雀」は、雀の宿を訪れた良いお爺さんが小さな葛籠を持ち帰り小判を手に入れた。反対に、欲張って大きな葛籠を所望したお爺さんは、箱の中から魑魅魍魎が出てきてひどい目に遭うという筋である。これについて、巌谷は「私は年をとつてるから……」と意気地なく小さな葛籠を持ち帰ったお爺さんが善とされ褒美を得るのは、「日本人の骨惜しみな早く老い込みたい、少しでも楽をしたい性質－人間として忌むべき性質」の表れであると述べる[17)]。他にも、「かちかち山」でなんの悪さもしない狸を天上へ吊したり、挙げ句には土舟に乗せて沈めたりするのは、「残酷」で「動物虐待の甚だしいもの」とする[18)]。このように、彼は古くからある昔話の「消極性」が、将来的に欧米列強と肩を並べていく国家を担うべき日本の子どもには、かえって悪影響を及ぼすと考えたのだった。

b．「桃太郎主義」の教育

ここで、巌谷の教育論からその子ども像についてみていく。彼が様々な著作や講演の中で度々繰り返すのが、「桃太郎」のような子どもを育てることを目指す「桃太郎主義」の教育であった。ここで言われる「桃太郎」とは、積極性、進取性、楽天性をもち、自由で無邪気、無造作な子ど

も像である。例えば、桃太郎の物語では、お婆さんが川から拾ってきた桃を割ると中から赤ん坊が飛び出してくる。巌谷は、「通常の人ならば腰を抜かすのだが、気丈な二人は、これは幸ひ、二人にはまだ子供がないから」と、お爺さんとお婆さんが赤ん坊を自分の子どもにして養育した点を評価する[19]。あるいは、桃太郎が「剛氣」で「腕白小僧」であったために鬼ヶ島へ一人で鬼征伐に行く場面からは、そのような「進取の氣象」と「健剛な氣」を培うことが子どもの理想であると述べた[20]。では、巌谷がこうした子ども像を理想としたことには、いかなる動機があったのか。それは、やはり彼の当時の時代認識からうかがい知ることができる。
既述のように、彼は教育に関する話題の中で、日清・日露の相次ぐ戦争に勝利した日本の状況について説明した。そして、今後日本が欧米列強と対等に渡り合い新たな地位を確立するために、「確固たる獨立心」と「進取の氣象」を培う国民教育の必要を訴えたのである。これについて、以下は『桃太郎主義の教育』からの引用である[21]。

「日本開闢三千年、國をして今日ほど発展した時はないが又今日ほど大切な時もあるまい。即ち新店の土台が据わるか、子役がいよゝ名題に進むか、首尾よく大学が出られるか、乗るか反るかの分け目である。そこで僕は考へた。今その大切な時に當つて、よく我國を導き得るものは誰か？我が桃太郎君を措いて又他に誰かあらうと。更に手取ばやく云えば、日本将来の國民教育は正に桃太郎主義ならざる可からずだ」

つまり、ここでは「桃太郎」に代表されるような子どもの気性を養うのが、新しい時代の教育の使命であり、そのような教育を可能にするのが「お伽噺」である。言い換えれば、お伽噺は単なる娯楽に留まらない日本を富国、強国にする重要な手段の一つなのであった。ところで、アンダーソンによれば国民の共同体は印刷された言葉、すなわちメディアによって一つの概念へと整形され、人々のモデルとなり共有されるものである［Anderson：1983］。この意味で、巌谷はお伽噺を創作し、世界のメルヘンの翻案をする過程で、昔話の中に固有の「国民性」を見出していった。また、そうしたお伽噺を人々が受容することは、国民共同体の形成のために重要な役を担ったと考えられよう。

これに加えて、巌谷は独自の教育論を述べる中で、それとは逆行するものとして当時の学校教育に対する批判を行っている。具体的に、彼によれば昨今の学校教育は単に十把一絡げに「大人化」した大人しいだけの子供を育てるものである。言い換えれば、それは「時を定めて蒔いた杉苗を、同時に引き抜いて来て生垣をこしらへ、そして年々その芽を刈つては丈を揃へ、幅を揃へて、一定の行儀好き形にしてしまふ」という「生垣教育」であった[22]。だが、彼にとって教育は優秀な人材をさらに伸ばす「開発主義」、「秀才教育」でなければならなかった。そして、その理想的な教育において目指すべき子ども像が、先ほど述べた「桃太郎」のような子どもなのであった。

従来の児童文学研究の領域では、彼のお伽噺は滝沢馬琴に強く影響を受けた「勧善懲悪」の趣向をとっており、その点で明治以降の学校教育観と一致したと評価される［菅：1956］。しかし、後述に詳しいが、巌谷はとりわけ家庭で親が子どもに与えるお話が教訓的な内容や勧善懲悪ばか

りの物語では良くないと、一面では否定的な見解ももっていたことが分かる。したがって、巌谷の教育観は、国家建設や国民共同体の形成を志向した同時代の公教育と目指すところは同様であれ、その方法において異なる立場にいたと言えるだろう。

(2) 家庭教育におけるお伽噺の役割

a．お伽噺の「嘘の価値」

先の話題とも関連するが、お伽噺の刊行されるようになった当初の教育界には、それを批判する意見もあった。反対派の論旨は大まかに分けて三つに絞れる。第一は、お伽噺の空想を「嘘」とする見解、第二に、内容の教訓性が弱いことへの不満、第三が、児童の娯楽を怠惰と同一視する考えである。具体的に、お伽噺批判は教育に関する講演の場や紙面上で展開された。例えば、博物学者の南方熊楠の弟子の一人だった福田太一による「寓話的お伽噺を葬れ」と題する論説がある[23]。彼によれば、お伽噺の「寓話」性は、「怪異的、迷信的」で「科学」に反するため児童の教育上宜しくない。ゆえに、「その他の方法をとって例えば、犬が大いにその美しい性質、立派な特色を発揮した、実際の事実をありのままに平易に綴つて、以て『犬の心』のいかなるものかを示した方が」望ましい。あるいは、「昔の人の考えたようなこと」を教えて子どもを「未開人の頭脳」と同一視するのは誤りである。福田のように従来の昔話やお伽噺の内容を虚言と糾弾し、子どもの教育から排除しようとする意見は、教育雑誌や新聞記事等に少なからず散見される[24]。

そうした反対派の意見に対して、巌谷はお伽噺の「嘘の価値」を主張した。すなわち、彼は、子どもには子どもに相応しい文学とも言うべきものがあると考えたのだった。具体的に、彼は「お伽噺には一ト跨ぎに三千里を飛ぶ靴が有る、此空想に興味をもった子供、大きくなると理学を研究して、一時間何十哩の汽鑵車を発明する…お伽噺の健全なものならば、只に教育に補益する許りでなく、却って更に之が為に一種の精神教育を施すに至るのだ」と述べる[25]。巌谷は、子ども時代は大人とは異なる性質を有するものであり、彼らには相応の思想感情があると考えていた。そのため、大人が良かれと思ってやることで却って子どもの害になる場合があるとした[26]。これと同様の主旨で、同時代の文学界に現れていた自然主義者とは異なると断りを入れた上で、彼は自らを「自然主義」であると述べ、「子供に依て原人の俤を偲ぶ」と題する文を書いている。ここで言われる「自然主義」とは、「自然の天性を尊重し之を保成する」ことである[27]。つまり、子どもには太古の原人に通ずるような想像力があり、大人はそれを満たすことで彼らを「教養誘掖して、立派に文明の仲間入りをさす義務がある」[28]。ゆえに、彼は自らのお伽噺が子どもにとり有益なものであると主張したのである。このような巌谷の思想は、同時代の教育者が求めた科学的知識に基づくお話とは違う、当時にあっては一見空想的で無益と考えられる物語の価値を認めていたものだと考えられる。

なお、昔話などの〈お話〉を好む子どもの天性を父母が察する必要がある点には、教育家で『女学雑誌』(明治18年創刊) 等の編集に携わった巌本善治も「昔噺に就いて」の論考で言及している。これによれば、子どもが夜寝ながら、母親の慈愛ある顔を眺め、「彼等に取りては最と妙なる音楽たる」お話を聞くことは「無上の美味」なのであり、ゆえに母親はそれが毎回同じ話であろう

と「英氣を新鮮にし、語調に力を入れて、爽快に話きかす」べきである[29]。巌本ように、教育界にも当初から、昔話やお伽噺などの物語の意義について理解をしめす層は少なからずいた。さらに、巌谷の取り組んでいた口演童話の活動は、大正期以降、学校の教師たち自らがお話を語る「教室童話」を生み出し、相互に交流しながらその裾野を広げていった。したがって、お伽噺の認識に関わる巌谷らと教育者との関係は両者の物語への見解の相違に端を発する単純な二項対立ではなく、教育者の側にもそれに理解を示す一定層が存在するという複雑な対立構図になっていた。

b．家庭における「菓子」

では、特に家庭におけるお伽噺の役割とはいかなるものであったのか。それは、一言で表せば「菓子のやうなもの」であった[巌谷：1916：235]。つまり、彼は、学校で教わる訓戒や知識が通常の食べ物・滋養物にあたり、一方で子どもが喜び楽しむお伽噺を、家庭を「無味乾燥」なものにしないための嗜好品、すなわちお菓子に喩えたのである。そして、ともするとお菓子を過剰に摂取しがちになってしまう子どもに対し、親がそれを適度に調整しながら与えることの必要性がそこには説かれていた。

ここで、巌谷が学校教育における学習内容と、家庭で吸収するお話とを分けて考えたのは重要な点である。彼は、「古代のお伽噺」と題する論考の中で、庶民の間に武士道の浸透していない近世以前の国民性を「極めて放膽で、自由で、且つ雄大」と評した。例えば、有名な説話の「竹取物語」を取り上げて平安時代には男女関係に遠慮がなかったこと、「鉢かつき」や「梵天國」の物語には勧善懲悪の一辺倒ではない、「人情自然の性」が発揮されていたことを彼は指摘する[30]。これに対して、既述のように「舌切雀」や「花咲爺」といった昔話は、全体に仏教や儒教の影響が著しく「消極的な道徳」が説かれていた。繰り返しになるが、このように彼は必ずしも先行研究で言われるような勧善懲悪的世界観を創作の基礎としていたのではなく、むしろ当時の列強と日本の状況を鑑みて、古代の物語にある自由で放縦な思想による教育をこそ志向していたのである。そして、彼は種々のお伽噺が家庭で両親により適宜与えられることで、子どもの中にそうした性質が育まれていくことを望んだのである。したがって、巌谷は学校と家庭という二つの教育の場を想定しながらも、ただ家庭を「学校教育の補完物」と捉えるのではなく、両者をあくまで別のものと捉え、家庭の〈お話〉でこそ養われる子どもの徳性の存在を強調したと考えられる。

最後に、巌谷の家庭における文学の価値についての著述から、子どもの教育における物語の意義の、別な一側面について述べておきたい。『女子処世　ふところ鏡』の〈婦人と少年文学〉の章によれば、お伽噺や創作童話を含めたあらゆる文学は、「工藝文学」と「美術文学」の二種に分けられる。前者は、主に教訓や時世を扱う新聞・雑誌・教科書等で、日常に応用ができる実用的なものである。一方、後者は「眞の美」を描いたいわゆる文学であり、突出した才能をもつ人物が作り何百年後にもわたり伝えられる物語である。そして、子どもに与えるべきお伽噺は、例えばイソップ物語のような単に教訓的なお話、すなわち「工藝文学」ばかりでなく、「純粋」で「詩的」な要素をもつ「美術文学」でなければならない。巌谷は、そのようなお伽噺による教育を、子どもに美を知るための知識を与えるという意味の「美育」であると考えた[31]。ただし、こ

こで言う「美育」は、例えば大正期以降の児童中心主義の下で子どもの「本性」との関わりから主張された児童文学の「芸術性」とは異なるものである[32]。なぜなら、彼のそうした主張はあくまで「国民教育」の実現から端を発したものであり、また、それは当時の世界とそこで日本のおかれた境遇を想定して発想されたことが、後述の引用からもうかがえるからである。

「是れから後の子供は、だんだん大きくならなければなりません。（中略－引用者）只躰が大きくなるばかりでなく、思想が大きくならなければなりません。度胸が大きくならなければなりません。膨張した國と伴はなければなりません。従って、之に話すお伽話（ママ）も、亦大きなものが欲しいのです。それには御婦人の思想が大きくならなければ、子どもを大きくすることは出来ません」[33]

だが、他方で彼はこのような見解を、実際の子どもにお話を語る経験の中で得てきたとも述べている。具体的に、彼はそれまで自らもやはり教訓的なテーマばかりの「お薬主義」でお伽噺を作っていたと自戒する。そして、そのようなお話では「形は違へても、内の主義はいつも同じ」になってしまい、しだいに話の種が切れてしまう。そうすると、子どもに話をする前から先の筋が読まれてしまった[34]。そこで、脳裡に浮んだ思想を基礎に自由な想像力で創作をしたところ、「千變萬化」のお話を作れるようになった。したがって、巌谷の「お伽噺」論は、将来の国家を担う人材を育てるための教育という社会的な使命と、現実の子どもと接した経験から得た「子どもの本性」についての知見とが重なり合う中で、しだいに編まれていったものだと考えられる。

ここで、大人とは異なる「子どもの本性」に即した教育を目指す機運の一つは、従来、鈴木三重吉により1918（大正７）年に創刊された雑誌『赤い鳥』にはじまる児童文学者らの創作童話運動にあったとされる[中野：1990]。そのため、巌谷小波の「お伽噺」は、彼ら「新しい」世代にとり旧態依然として捉えられてきた。言い換えれば、お伽噺は物語の「教訓性」や「娯楽性」ばかりを重視し、古くからの昔話の枠組みに縛られその「文学性」を考慮しないものと受け取られてきた[菅：1956：63]。しかし、巌谷のお伽噺は、実際の子ども達との関わり合いの中で彼らの「本性」を考慮しながら創られており、また、前述の独自の文学観に根ざした美育の一つとして、彼らに届けられたと言えよう。

おわりに

ここまで、児童文学作家である巌谷小波の「お伽噺」論を取り上げ、明治後期の家庭教育における〈お話〉のあり方の一端を明らかにすることを課題として論を進めてきた。

巌谷小波は、お伽噺の創作をきっかけに児童文学者としての地位を確立し、様々な場で子どもへの口演や大人向けの講演会を開く過程で、自身の家庭教育論とお伽噺に対する認識を深めてきた。彼の家庭観は、同時代のジャーナリズムの言説にみられたのとほぼ同様の、「愛と信頼」に基づく親子の繋がりを重視したものである。また、それは男性が外へ、女性が家を守ることを第一とする男女分業論の立場にあった。だが、文明国としての日本が世界に台頭するためには、あるいは、本来の文学者という立場から、彼は女性にも文学的教養と家庭の外での社会的な交際が

必要であるとも述べた。この点で、欧米に由来する家政の新知識の修養を強調した当時の家庭教育観から、彼の考えは一歩先を行くものだったのではないだろうか。

さらに、巌谷の一連の家庭教育論やお伽噺の創作の背景にあったのが、ヨーロッパやアメリカなどの列強国の中で日本が外交上対等な立場で渡り歩いていく国力を身につけることであった。そのため、彼は進取の精神に基づく「意志の力」を養う国民教育が、将来の国家を背負っていく日本の子どもたちに必要であると提唱した。そしてこれが、その家庭教育観の根本の動機となったのである。加えて、こうした教育は単に学校と家庭の間の教育だけでなく、学校・家庭・社会という三者の関わりの枠組みでそれぞれが独自の機能を果たすことで可能となるものだった。

上記のような思想に基づく巌谷のお伽噺は、古くからある昔話を「国民童話」として書き直したものだった。同時に、それは巌谷自身がお伽噺を創作しながら、固有の「国民性」なるものを生み出す過程でもあった。他方、そこに現れた教育観では、大人しいだけの子どもを育てる学校教育が批判的な立場で捉えられ、お伽噺の「桃太郎」のような剛毅で積極的な子ども像が目指された。また、彼は自身の経験から、そのような教育には科学的・教訓的な話よりもむしろ、子どもの特性に合った想像力豊かな空想的お伽噺こそ相応しいとも考えていた。さらに、それらのお伽噺は、巌谷によれば家庭教育でこそ子どもに与えられるべきであった。なぜなら、お伽噺は彼らにとって「菓子」のようなもので、楽しみの中に教育的な効果を期待するものだからである。こうした、ある種の「遊び」において子どもの豊かな成長を育むという発想は、同時代の玩具や絵本に教育的な価値が見出され始めたのと、同様の文脈であると言えよう。

最後に、今後検討すべき課題について触れておく。上述のような潮流に対し、時代を経た昭和初期になると、柳田国男に代表される民俗学者たちは、童話批判を行うようになる。柳田によれば、明治期以降の「童話」は、村落共同体の口承文芸であった昔話を教育上の「効果の利不利」により取捨選択し名称づけただけである[柳田：1998]。しかし、古くから口伝えされてきた昔話は、その教育的如何に関わらず様々な話が繰り返し語られるものであり、また、子どものみならず大人にも共有されるような単なる「童話」ではない物語として幅広い概念を含むものであった。これについて重信は、柳田のこうした指摘をふまえた上で、近代の「家庭」とは、子どもに対する効果の有無にしたがい団欒の場を作り上げてきたものに他ならないと主張する[35)]。

上記は、今回の本稿の課題の範囲を越えるところにありこれ以上追求することはできないが、家庭教育と物語の関係を捉えていくにあたり見過ごせない指摘であって、今後さらなる考察を深めていくことが必要であろう。

注

1）『少年世界』第２巻第21号、博文館、1896.11、89頁

2）口演童話については、拙稿「口演童話の学校教育への普及過程 - 社会活動における教師の学びに着目して」（『早稲田大学教育学研究科紀要』別冊18号 - １、2010）に詳しい。

3）国立国会図書館NDL-OPAC、早稲田大学WINE-OPAC蔵書検索より

4）千野陽一『近代日本婦人教育史；－体制内婦人団体の形成過程を中心に－』ドメス出版、

1979、p.40
5）同上169頁
6）巌谷小波『家と女』隆文社、1906、25頁
7）同上227頁
8）『女子処世　ふところ鏡』大倉書店、1907、27頁
9）山本敏子「日本における〈近代家族〉の誕生－明治期ジャーナリズムにおける『一家団欒』像の形成を手掛かりに－」、『日本の教育史学』第34号、1991
10）中嶌邦「近代日本の家庭教育－女子教育を中心に」、『現代家庭の創造と教育』ドメス出版、1995
11）巌谷小波『新家庭　女子供の巻』大倉書店、1916、200頁
12）同上205頁
13）同上200頁
14）『少年世界』第２巻第８号、博文館、1895.10、25-29頁
15）巌谷季雄（小波）編『日本昔噺　第一編　桃太郎』博文館、1884-1897、１頁
16）巌谷小波「お伽話を讀ませる上の注意」、『婦人とこども』第９巻第４号、1909、９頁
17）同上10頁
18）同上11頁
19）同上12頁
20）『桃太郎主義の教育』東亜堂書房、1915、30頁
21）同上11頁
22）同上16頁
23）『読売新聞』1908年４月５日朝刊
24）例えば、「お伽噺改善論」（『読売新聞』1913年１月10日朝刊）、「漫言」（『教育時論』第１号、1895.4、19-12頁など
25）「嘘の価値」、『婦人とこども』第６号第８巻、1906、14-16頁
26）巌谷小波『新家庭　女子供の巻』大倉書店、1916、234頁
27）同上209頁
28）同上210頁
29）巌本善治「昔噺に就いて」（『少年世界』第１巻第18号、博文館、1895.9、63頁）
30）同上242頁
31）巌谷小波『女子処世　ふところ鏡』大倉書店、1907、94頁
32）大正期はロマン主義的な「無垢」な子ども像を作品に反映した、小川未明らの童話作家が新たに登場した。それに伴い、児童中心主義思想の下で鈴木三重吉による『赤い鳥』なの児童文学が生み出された[河原：1998]。
33）巌谷小波『女子処世　ふところ鏡』大倉書店、1907、115頁
34）同上103頁
35）重信幸彦『日本児童文化史叢書34－〈お話〉と家庭の近代』久山社、2003、96頁

引用・参考文献

・巌谷小波『日本昔噺　第一編　桃太郎』博文館、1884-1897
『家と女』隆文社、1906
「嘘の価値」、『婦人とこども』第６号第８巻、1906

『家庭口演十種』木村小舟編、大倉書店、1907
『女子処世　ふところ鏡』大倉書店、1907
「お伽話を讀ませる上の注意」、『婦人とこども』第９巻第４号、1909
『桃太郎主義の教育』東亜堂書房、1915
『新家庭　女子供の巻』大倉書店、1916
『我が五十年』東亜堂、1920
・上杉孝實編『社会教育の近代』松籟社、1996
・河原和枝『子ども観の近代－『赤い鳥』と「童心」の理想』中公新書、1998
・菅忠通『日本の児童文学』大月書店、1956
・小林輝行『近代日本の家庭観　明治篇』弘文堂、1977
・是澤優子「明治後期の家庭教育における〈お話〉観に関する一考察」、『東京家政大学研究紀要』第42集（1）、2002
・小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991
『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999
・重信幸彦『日本児童文化史叢書34－〈お話〉と家庭の近代』久山社、2003
・千野陽一『近代日本婦人教育史－体制内婦人団体の形成過程を中心に－』ドメス出版、1979
・津曲裕次「石井筆子研究－『大日本婦人教育会』との関わり－」、『純心人文研究』第11号、2005
・長澤修一「巌谷小波の翻案世界：明治20年代をめぐって」、『梅花女子大学文学部紀要　比較文化編５』2001
・中嶌邦「近代日本の家庭教育－女子教育を中心に」、『現代家庭の創造と教育』ドメス出版、1995
・永田桂子『絵本観・玩具観の変遷』高文堂出版社、1987
・中野光『大正デモクラシーと教育－1920年代の教育』新評論、1977（1990版）
・真橋美智子『「子育て」の教育論－日本の家庭における女性役割の変化を問う－』ドメス出版、2002
・牟田和恵『戦略としての家族－近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、1996
・柳田國男「口承文芸史孝」、『柳田國男全集』第16巻、筑摩書房、1998
・山本敏子「日本における〈近代家族〉の誕生－明治期ジャーナリズムにおける『一家団欒』像の形成を手掛かりに－」、『日本の教育史学』第34号、1991
・Benedict Anderson “Imagined Communities-Reflections on the Origin and Spread of Nationalism” Verso Editions,1983：『想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、リブロポート、1992
・『少年世界』第１巻第18号、博文館、1895
・『少年世界』第２巻第８号、博文館、1895
・『少年世界』第２巻第21号、博文館、1896
・『読売新聞』明治41年４月５日朝刊
・拙稿「口演童話の学校教育への普及過程－社会活動における教師の学びに着目して」（『早稲田大学教育学研究科紀要』別冊18号－１、2010